

津田昇平教話 第二七話

令和三年一月二七日 朝の教話

神には口がない。氏子には口耳があるか
ら、口耳のある者に言つて聞かせよ。

おはようございます。令和三年一月二七日をお迎えいたしました。

金光教という、まあ名前があるのは、こんこうだいじょうけん金光大神様という方がいらっしやあって、まあそこから名前ができたというふうにしてまあ言われております。教祖様きょうそさまと言われる方というのは、金光教という言葉は一度も残しておられません。

後のちの方、直信ちしん、直信ちしんというのは、教祖様のお取次とりつぎを頂いた方ですね。直々に教えを頂かれて信心をなさったということを直信というのですけれども、その直信の先生方が、数名の方を中心にしながら、金光教というものをこう創つくっていかれた。

教祖様自身は、御道ごみち、御道ごみちというふうにして仰あやっておられましてね。

「この道は」とか、「御道は」というふうにして、道という表現を使っておられます、金光教という所謂いわゆるまあこう組織そしきというふうなものっていうのは、存在しなかったんですね。

ところが、そのお弟子さん達が、このまま教えを大切にしていきたいけれども、形うづというもの、器うつわというものがないと、そのうち消えてしまいうような気がするということですね。教祖様は別にその、形にとらわれるつもりはなかったようなんですけれども、御道はまあ広がりさえすればいいと、教えも広がりさえすればいいということでしたけれども、広がるために、広がっていくために、そのために「形」というものがどうして必要になってくるのではないかということをお弟子さんからも進言しんげんさ

れ、で、まあそれもそうかということとで少し考えられて、もちろん神様とのやり取りがあつてのこととは思いますが、金光教というものが形づくってということ、御道というものが金光教という一つの国に認められた組織、団体として形を持つようになつたという方向になりました。

神様のお名前は天地金乃神様てんちかねのかみですから、そこから金きん、光るといふ金光大神こんこうたいじんという御存在、神様と人間との間に立つてですね、氏子うじこの想いを神様に取り次つぎ、それに対する神様の御想みおもいを一人ひとりの氏子とに取り次ついでいく、これを取次とりつぎの業わざと言います。その取次をなさる御存在、人間なんですけれども、人間でありながら、神様の役割を果たしていく、

神様と人間との間に立って、生神いきがみとして生きている人間としてね、お働き下さる。ま、そういう間に立つ仲介役なつかい、翻訳ほんやくできる人を差し向けられた、その最初が教祖生神金光大神様といわれる方になります。

生神金光大神様になぜこう託たくされたのか、というところですね。まあ金光大神様、教祖様は「万国まで残りなく金光大神でき、おかげ知らせていたしてやる」と、これ神様の御神伝ごしんでんなんですけれども、教祖様が頂かれました、つまりこれも神様が仰ったんですね。

「万国まで残りなく」ま、世界中ということですね。世界中まで、金光大神ができる神様が仰った。そのためにおかげを知らせ、分らせる、悟さとらせて、そして、広げていきなむらうとこういふ。

この御道おみちが、他の多くの信仰がある中で、やはりちょっと特徴的とい
うのが、取次なんですよ。それは佐藤光治郎さとうみつじろうという方の伝えがあり
ましてね。佐藤光治郎さとうみつじろうって、まあ金光教団というものを創ったのが佐藤さとう
宿老しゅくらう、宿老しゅくらうと言って、佐藤範雄先生さとうのりおという、まあ俗に三直信さんじきしんて言われる
方のお一人なんですよ。ちなみに三直信さんじきしんというのは、佐藤範雄先生、広
島の芸備教会げいびですね、で、大阪教会の二代白神新一郎先生おおさか。初代もいらっ
しゃって、初代も大きな力を持っていらっしゃったんですけれども、二
代白神新一郎先生なんばで、もう一人が難波教会なんばの近藤藤守先生ことだいらふさむねというふう
にして、言われています。

で、この三人を中心にして金光教教祖様の教えをしっかりと後世に残す

ために、もう所詮流行り神で終わってしまうことにならないように、大事な教えを残していけるようにという願いのもとで、形をつくっていかれた。で、たかほしとみえ勿論それはこう形の上ではあるんですけど、精神的な信仰の中ではたかほしとみえ高橋富枝先生というこんしょうみつよし金照明神様という御存在がまた大きかったわけですけど、あまり表には出て来られなくて、取り次ぎ助けるというところに中心を置いておかれたわけですけども、ま、目に見える形の上ではこの三直信と言われる佐藤範雄先生、二代白神新一郎先生、そして近藤藤守先生、この御三方が中心になって、教団というものを創っていかれたわけですね。

で、この佐藤範雄先生のお兄さんやったかな、ご兄弟がいらっしやい

ましてね。それがまあ、佐藤光治郎先生で、後のちに芸備教会の副教会長にまでなられた方なんですけれども、まあこの方のお伝えですね。この方ももちろん直信で、教祖様のお取次を頂かれた方なんですけれども、ある時金光様が、こういうことを仰ったと。

神には口がない、氏子には口耳があるから、口耳のある者に言っけて聞かせよと、神様が仰せられる。

【理Ⅱ 佐藤光治郎 八】

と、言われた。

「神には口がない、氏子には口耳があるから、口耳がある者に言って聞かせよ」ま、話して聞かせよということですね。「神様が仰せられる」と、言われた。ちよっとまあ主語が消えているんですけど、大体ね、もう少しこう分かりやすく言うと、教祖様が佐藤光治郎先生に仰ったわけですから、何と言ったかといつと、「神様がこないゆつてはるんや」と。神様が教祖様に「神には口がない」と。「言いたいことがあっても、お前から人間に分かるようにばーっと喋れるような口があるわけやあらへん」と。「でも氏子、氏子には「氏子というのは教祖様のことですね。まずは金光大神様ですね。で、教祖様に向かって、一人の人間である教祖様に向かって」「氏子」と。「お前は口耳があるな」と。「口耳があるから、だから、

口耳のある者に「つまりこれ、人間、普通の参って来る氏子ですね。最初の「氏子」というのは教祖様、「氏子には口耳があるから」ってというのは教祖様に対して「口耳のある者に言っ^てて聞かせよ。」これ、参って来る氏子、口耳ありますね。

話すということと、聞くということが出来る。話を聞いて助かる御道おみちであり、話を聞いて助かる神様を信仰しておりますから、だから教祖様に、人間である教祖様に、人間である参って来る氏子に対して話して聞かせなさい、神には口がないけど、お前は口があるし、耳があるやろと。氏子の話を聞くことができるし、神の声はお前は間に立って聞く力があるやろと。で、それを口にして氏子に取り次ぐこともできるやろ、とい

うことですね。

だからまあ「お前口があるし耳もあんねんから、氏子の話聞いて、ほんでまた神の話も聞いて、それを氏子に取り次いでやってくれよ」と。と、神様が私に仰るんやと。教祖様にね。そのことを佐藤光治郎先生に仰ったということですね。

まあちよつとこう、ここだけにして、短い文章のご理解になりますんで、まあこう解釈としては、これま、教祖様が、神様に言われたっていう解釈と、ま、もう一つ解釈があります。それはこう氏子というのは、神には口がない、氏子には口耳がある、その口耳があるというのは、その教祖様だけじゃなくて、これはある意味光治郎先生に対して話をし

ているとも言えるんですね。

つまり、教祖様が佐藤さんにね、「あんたも口耳があるな」と。「口耳があるんやから、あなたが御用ごようして、お取次する機会があったら、参ってくる氏子、口耳のある者に、言ってお話をしよ、この御道のこと、信心のことを教えてあげなさいと、神様はそう仰ってるから」と、佐藤先生が自分自分に言われた、という解釈がある。

これはどちらも解釈としてはある。で、結局のとこ別に一緒なんですよこれ。なんでかって言いましたらね、ま、教祖様に言われても、教祖様はまああの金光大神の走りっちゃ言葉変ですけどね、一番最初の御方おかたです。御道で言ったら金光教師第一号が教祖様になる訳ですけど、お結果けっかい

に座って取次をする者、ひろまえ広前の守は皆、「万国まで残りなく金光大神でまの、一つの席を与えられている。できるできないじゃなくって、与えられて、そしてそのお役を頂いて、命を懸かけて奉仕ほうじさせて頂く。そういう立場になります。

ですんで、金光大神様、最初の金光大神様である教祖様がなさったことを、同じように広前の守はさせて頂かなくてはならない存在なんですね。「死んだと思うて欲を放して、天地金乃神を助けてくれ」ということですね。これを広前の守も受けて、同じ願いのままに参って来る氏子に教えて聞かす。それが求められるわけですね。それでこう、私も御道の教師にならして頂いてから、取り次ぎ助けるところに命を懸けて

「ここまで来さしてもらったわけですからねども。」

まあこうやって改めて、神様がなんで、人である教祖様きみうぢに、あるいは

「万国まで残りなく金光大神こんこうだいじんでき」って、残りなくたくさんできるその

金光大神、それぞれの広前ひろまえの金光大神様に託たくされてるのはなんでかって

言いましたら、生きてるからなんですよね、これ。

生きている、だから口があるし、耳がある。だからなんですよ。これ

ね、例えば教祖様でも亡くなったらね、これ、できないですよ。だって、ま

あ極端きまくだんに一言で言いましたら、どんなに御霊みたまの位が高くてま

いきがみこんこうだいじん
生神金光大神様なまのかみと言っても、肉体が無くなったら、これ御霊神様みたまのかみなんで

すよ。御霊神様になったら、生きてる人間からしたらね、そりゃ神様と一緒に、もう聞いてくれてはんのか、喋くちやってくれてはんのかって確証はないですよ。

でも生身の人間であつたら、肉体があると見えるし、藤守ふじもり先生の言葉で借りたら「ま的なし」やなくって、生きてる金光大神様、自分にとっての金光大神様、そのお広前の金光大神取次者とりのつぎしや、広前ひろまえの守もり、つまり肉体がある、的があるわけですね。だから信心しやすかったと仰おほってるけど、まあそれはそうなんですよ。これ、生きてないと駄目だめなんですよね。生きてないと、話を聴いてあげること、話をしてあげること、できないんです。いよいよのところは。

ま、い祈念きねんの中で聴いて頂くにはどうもね。そやけど、それはどこかこう、一方通行の部分があります。氏子から神様に対して、じや神様が仰っていること、思おもし召めしを、じゃどれだけ自分が祈念のただけで受け取ることができるんかって、これ難しいですよ。それがまあ本当にできるんやったら教祖様そのものでね。教祖様でもそう簡単じゃなかったはずなんです。で、またそれができないから世がめげる、潰つぶれていく。ま、当時は「世が開けるといっけねども、開けるのでなし、めげるのである、潰れていくのである」「って、まあそうやって仰っておられましたかねども。

そう思うと、やっぱりいっしょに生きてるといっことは凄すいく大事なことでね。

私たち御用^{ごよう}さして頂くといい立場で考えたら、死んでからできる御用ももちろんあるですよ。そりゃ生きてる間にしっかりとたましいを磨^{みが}いて、磨いた御霊の働きというものを、あの世に持っていく。でも、あの世に持っていいっても、これで死んでから神様の御用^{ごよう}に立つという気持ちがあるって教えもあって、それも嘘^{うそ}じゃないんですけど。

でもね、教祖様から含めて偉大^{いたい}なそういう人を助けるために命を懸^かけた先人の方々もう山ほどいらっしやいます。皆さん御霊様として力持って、いっぱいいらっしやるけれどね、でも御道^{おみち}全体として、今だんだん何か下降^{かこう}気味なんですよね。時代のことも含めてかもしれませぬ。苦しんでいる人はいらっしやっても、それを取り次ぎ助けていくという生き

てる人間というのが、もう全然少なくなってきたんですね。

じゃあ結局どんなに偉大な、御道の先生がいらっしやって、徳を積んでお国替えして、死んでから御用に立つ言いましてもね、じゃ御用に立って下さってんねんやったら、御道はもっと開けておかしくないんですよ。じゃ、それが出来てないのは为什么呢。簡単ですよ。生きてる者がしっかりと神様の御用に立ってないからです。

死んだ御霊様がどんなに徳があっても、その徳を引き出すのは生きる人間なんです。御霊様だけでは、その積んだ徳を顕すということはできません。例えば和太先生が、慎治先生が、たまの先生が、どれだけ徳を積

んで、人を助けて来られたとしても、それだけでは守ってあげたりとか、お徳で何とか道をつけようと、御みたまの霊神様としてね、お働き下さろうとしても、これ限りがあるんですよ。そのお徳を頂こうと思ったら、生きる人間が引き出さんといかんのんです。

引き出すということは、その力というものをこちら側の信心によって、しっかり貰もらわんといかんのんです。これ、神様からでも一緒ですけどね。

頂けるような信心をせんといかんし、で、私は神様だけやなくて、

和太先生、慎治先生、由ゆ幾先生、たまの先生、由幾先生というのは初代和太先生の奥様ですね。この、尼崎教会で御用おつかたして下さった御方、ま、由幾

先生は、教師ではいらっしやいませんでしたけれど、でもお裏ですって

初代を支えて下さり、御用して下さり、参って来る氏子に対しても祈って下さっていた、その、和太先生、慎治先生、由幾先生、たまの先生、この四名の御方を、私は大切に、どうか参って来る氏子に、このお広前を慕^{した}って参って来る氏子に、どうぞこう、そのお徳でお守り下さい、お導き下さいと、いつもお願いさせて頂いております。

とは言うものの、これ、生きてる人間である私が、ここで話を、氏子の話を聞いて、神様に取り次^といで、それに対する神様の御心^{みこころ}、伝えたいこと、教えてあげたいこと、ま、つまりは信心ということですね。天地の理^{ことわり}ということ、それを、少しずつでも神様の思し召しを氏子に分かるように、伝わるように、目につくように、それが十年掛^かかって、二十年

掛かってても、あるいは五十年掛かってても、神様の御心に叶うように、寄り添いながら、導きながら、祈りながら、共に歩いていくということが求められると思います。それが金光大神のお役やなあと思っています。何が言いたいか言いましたら、生きてるから御用もさして貰えるし、生きてるから氏子もお取次とりつぎを仰がせて頂くことができるということなんです。そういう意味じゃ、生きているということ、肉体があるということ、生きていく間しかできない御用がやっぱりあるんです。寧ろむし今求められてんのは、生きてる人間の御用なんです。

死んでいっばい御用して、死んで徳の高い先生はもう御霊、御霊ごれいせい前でね、あの世にいっばい溜たまっていますから、もうあっちの世は徳ばっかり

でしような。せやけど、その徳を引き出す生きてる人間がおりませんの
んでね。だからしっかりと生きてる人間が、神様、御霊神様の御心をお
喜び頂けるようなね、信心をまた御用をさして頂かんといかんし、また
氏子の方も、お取次して下さる金光大神様がいてくれんのが当たり前と
ならんように、それは教主金光様にしてもそうやし、それぞれのお広前
の、金光大神様にしてもそうやし、もっと言うたら、歴代の金光大神様
にしてもそうやし、その神様と人間との間を取り次ぐお取次、お取次と
いうのは金光大神取次の略さへんをお取次と言うんですけど、その金光大神取
次をなさって下さる歴代始め、これはま、御霊神様ですけど、生きてい
る今お結界に座って取り次いで下さる御存在いんまぞうこ、神様がその広前の氏子の

ために差し向けて下さっている、その金光大神様のお取次を願って、頂いて、日に日に新たにね。「生神金光大神御取次、真一心おんこのつぎに願しめたまえ、日に日に新たに頂かしめたまえ」御取次を願い、頂く。御取次を願い、頂く、日に日に新たに願い、頂いていく。そうする中で、信心けいこの稽古けいこをさして頂くということですね。ま、毎日学校に通うようなもんです。遠方の方はなかなか毎日うちゅうわけには出来ません、参拝もね。だからこそ月に一回のお参りでも、大八車だいはちぐるまに神様のお徳を積んで帰ることが大事になるんですけど。

でもまあ今は時代も発達してますんで、こういうツールも含めて神様のお話をさせて頂く機会になりますんで、遠方の人は話聞けるからもう

参らんでもええわってなる危うさがあります。けどもその危うさをよく
分かりながら、こっちも本当に危ういなと思ったら、その人には、お話
が聞けないように私は止めます。ええ、きちんとお参りをさせて頂くと
いうその願いの中で、こちらもお話を流して聞かせてもいいなと思っ
て、教話配信も続けておりますけれども。聞けてるからもうそれでいい
やって、お参りせんでもいいやって言う人には、聞かせるつもりはさら
っさらありません。それは信心がおかしなるのは分かるからですわね。
でも、話を聞くということは大事です。

ま、尼崎教会に御縁ごえんを頂いている人やったら尼崎教会にやし、他教会
で信心されている方もたくさん聞いていらっしゃるようですけれども、

それはそれでその御縁のあるお広前に話は聞かして貰ったらいいし、で、私のお話することは教祖様がお話されたことおんなじことをお話してますんで、それを私の言葉でお伝えしますんで、それを聞いてなるほどと合点がいったって、それぞれの広前で信心されたら、それでおかげは頂けます。で、それで結構なんですけれども、やっぱりお参りは大事ですんで、参拝、ご祈念、御取次は大事にして頂きたいと思います。

で、最後、今日は教話というよりも、神様が何故お取次とりつぎというものを大事になさったのか、金光大神様を差し向けられたのか、なぜ御道おみちが金光教、金光大神様の教えということですよ、要するところ。そこを中心

になったんか、教祖様だけじゃない、それぞれの**お広前ひろまへ**の**金光大神様**を万国まで残りなく**金光大神**でき、おかげを知らせ、悟さとらせて、そして、参って来る氏子にね、おかげを授けるといふ、その神様の御裁伝ごさいでん、御裁伝ごさいでんっていうのはお知らせですね、を残されたのんか、今こうして私がお話をさせて頂いておられますけれども、聞くことが出来ている方は皆、いわば**尼崎教会**の今の**金光大神取次者とりつぎ**である私のお話を聞かして頂いている。

これ、私が生きてるから喋なれてますわね。でももし私が死んだらもう、まあ録音は聞くことができるかもしれませんが。でも、生の人間が喋ってることと、亡くなった人間の録音を聞くというのは、これまた違いますね。入り方が違うんですよ、そら。全然違いましたね。だからやっぱり

生きてる人間というところは、やっぱり大事は大事やなあと思いますね。
今、生きていますということ、私の心臓が今生きていますということに意味
があるんです。これ、大きいことですね。

ま、そういうおかげを、神様からも氏子からも両方の恩人がこの方金
光大神であるというふうにして教祖様は讃たたえられましたけれども、でも
本来は、生きている金光大神広前の守は皆、本当はそうでなければなら
ないんですね。それだけの、神様からも恩人、氏子からも恩人と言って
頂けるような御用をせんとあきませんわね、私はね。ま、私らは、と言っ
てもいいでしょう。で、氏子の側は、そういうお取次が、金光大神様を自
分達のために神様が差し向けて下さっとるんやから、やっぱりそれはあ

りがたく頂いて、当たり前にならんように、まあ、あんまり当たり前になつたら、神様もそりゃ金光大神様を今度は引き取られるでしょうからね。

これは氏子の方も神様の方も金光大神も、それぞれの立場でそりゃ緊張がありますよ。油断したら離れていきますからね。そないならんよ、うに、当たり前ということは何もありませんので、そもそもが氏子助けるために「金光大神差し向け」なんですからね。ここが一番かんじんかなめ肝心要で、誰のために金光教ってあるんですか、誰のために広前はあるんですか、誰のために金光大神を差し向けているんですか、これ氏子のためなんですから。

私たち、皆さんのために、神様は、教祖様を始め、金光様を始め、それ
ぞれの広前の守を差し向けて下さってるんですから、それが何よりの最
大の恵みの一つやと思います。それを当たり前になってしまわんように
ね。おかげだらけで、おかげを頂いて当たり前で、教会があって当たり
前、広前が開いてて当たり前、電気付いてて当たり前、門が開いてて当
たり前、せいぎねん勢祈念があって当たり前、お取次して下さって当たり前、当たり
前になったらおかげはないですよ。それは怖いことですよ。

そないならんように、お取次を頂くことができる、そのお恵みを神様
が下さっているし、その願いを受けて、氏子を助けたいという神様の願
い、どうか助けて下さいという氏子の願いを受けて下さる金光大神とい

うその存在があって、初めて成り立つことですから。だから神様も金光大神様もやはり氏子にとったら恩人になるんですね。それをやっぱり忘れたらあきませんね。

ま、そういうことで月例祭げしれいさいというのがある訳です。尼崎教会ではね、第二土曜日というのが金光大神様の月例祭になります。これなんで十日かというと、もう一つ天地金乃神様てんちかねのかみの月例祭がありますけどね。十日とというのは、十月十日に教祖様が亡くなられましたね。ですんで、まあ月命日になるんです。祥月命日しやうつきひは十月十日として、月命日なんで、その月命日に金光大神様のお日柄ひがらということで、そのお徳を讃たたえる、お礼申

し上げるといっただけではなくって、教祖様は生きてる時から金光大神様のお祭を神様に仕えろと言われて、自分が死んでからじゃないです、生きてる時にお祭仕えておきなさいって。

なんでかって言ったら、まあ肉体は死んでも構わんもんですね。まあそれは今生きてないと駄目^{だめ}って言いましたけど、そうなんです。でも、御霊^{みたま}は永遠になりますでしょ。だから御霊の働きにおかげがありますから。だから教祖様は自分の御霊様をお祀り^{まつ}なさっている。生きてる時から。そこに働きがあるって、これ教祖様だけじゃなく、「万国まで残りなく金光大神でき」、私やったら私が尼崎教会の金光大神取次者^{とりぎしや}としておりますから、私は私でこのお祭、日々、毎月の月例祭で、金光大神様の月例

祭は教祖様だけの話やないんです。

歴代の尼崎教会の金光大神様に繋がるけど、まず今私がお結界で金光大神様のお取次とりつぎをさせて頂いておりますから、私の御霊を祀るということでもあるんですね。これま、どこの広前でも本来そうなんですけれども、だから私は私の御霊の働きを祀らんといかんのんです。至らんところがあっても、神様のお役を頂いて願われて、そこに奉仕させて頂いております。

できるとかできんの話やない、願われたお役を全うするように足りなくっても命を懸かけてさして貰う、ただそれだけの話ですから。で、そのためにここまで来さして頂きましたけど、その中でおいおいに人が助か

ってありがたいことなんですけれども、その月例祭、金光大神様の月例祭は、神様への御礼おんれいであり、また、神様の願いを受けて下さった教祖金光大神様への御礼でもあり、また今も御用ごようして下さり尼崎教会の月例祭は、尼崎教会の金光大神月例祭は、尼崎教会の金光大神様の御霊様のお働きにお礼申し上げる、ま、そういうお祭になるわけですね。

まあそのようなことで少しお祭の頂き方、二回月例祭あってもおんなじやないですからね。意味合つないは全く、繋がりはあるんですけれど、金光大神様というものを中心すに据えて、御礼のお祭をお仕えする、それが第二土曜日の金光大神様の月例祭になります。ま、そういう心でなんとなくしに月例祭、月例祭って言われてね、昔は月並祭つきなみさいいうてお祭されて

いらっしやっただしょうけれども、でも、お祭にも意味合いがありますんで。お礼を申し上げましょう、お礼を申し上げましょうって、ひと月のお礼を、て言いますけど、金光大神様のお祭には金光大神様がいらっしやるということ、その働きをして下さっているということ、その働きの中心は御霊であるということ。これ何よりも生きてる人間である、今やったら私、教祖様やったら教祖様であつたりで、私であつたり、その生きてる人間の御霊の働きというものにお礼申し上げる。ここがまあ肝心要になってきますね。金光大神の姿、形に目を向けるな、やったかな。「金光大神の姿、形にはおかげはない、御霊の働きにおかげがある」っていう教えがありますけど、ま、これが取次の根本なんですけれども、

私という生きてる人間の肉体ではなくって、私の分御霊様わけみたまのおかげがあるんです。

だからこそ、人を助けられるだけの魂たましいをこっちが磨みがかんとあきませんわね。それは、ま、信心で磨みがくしかないんですけど、私は私で信心して磨かして頂いてきた。起こってくる事柄じこうばいを通じてね、役柄を通じて磨いてきた。だから人が助かっていく、で、これ御霊の働きなんで、私の肉体なんて別に大したことないですよ。そんな走る力があるわけでもないしね。人より速いとかいうわけでもないし。

私の御霊の働きのおかげがあるだけであって、後はまあ肉体は目と鼻と口が付いっとったら、まあ別にそんなにいいんですよ。何もイケメンじゃ

なくていいでしょう。関係ないですもんね。喋はなれたらいいし、聞けたらいいんですから。まあ目はないよりはあった方がええかもしれませんけど、まあその程度のもんでね。後はそんなどうということでもないです。ま、生きてないと話になりませんのんで、そこは大事なところではありますけれど。目が見えて、顔があつてね、とりあえず目が二つ、鼻が一つ、口が一つ、耳二つあったら、ま、それでOKですよ。それでとりあえず、氏子にとつたら、話聞いてくれるし、喋はなってくれるし、目当てがあるしね、もうそれでいいですよ。

うーん、まあイケメンやなくても、頭禿あたまはげとっても別に構いやしません。

ええ、肝心要なのは、生きてて金光大神様の御霊、金光大神様という位

にある御霊としてね、生神として取次をして下さってるかどうか、こ
が肝心要やなあと思う。そのお働きによって、神様の御働きを顕あじわして頂
いておる訳です。その広前の守もりのね、御霊様の働きの顕して下さる天地
金乃神様のお徳を頂いてる訳です。お互いにね。

ま、そういったことを少しまあ解説のようにはなりましたけれども、
金光大神様こんこうたいじんを頂くということについて、少し今日はお話をさせて頂きま
した。それぞれそういったことを思いながら、想いを馳はせながら、神様
に、金光大神様に、良くお礼を申し上げて、信心さして頂きましょう。お
かけを頂きながら恩を忘れたり、分からんというのは、まあこれまため

ぐりを積みますんでね。だから、神様の御恩ごおん、金光大神様の御恩ごおんというものをよう分かって、そして信心さして頂かんといかなあと思いますね。

はい、どうぞここからもおかげを頂いて下さい。今日は今日でこうして話を聞かして頂いてます。これも取次とすじの一つですね。お結界けっかいに参るということができなくっても、一人ひとりに合わせてってわけではないけれども、天地の道理について話をしておりますんで、それもまた金光大神御取次おんとりつぎですね。み教えを頂いても言いますけれど、ま、それを頂いてわが身みわが一家を練習帳にして、今日も一日信心けいこの稽古けいこに励はげんで下さい。

良くお参りでした。

（了）



津田昇平教話 第二七話

令和三年一月二七日 朝の教話

発行日 令和六年三月二十五日

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五
